

## その2：参加型手法の開発調査への応用ーラオスでの経験

AAI ニュース 22 号ですでに紹介したように、ラオスにおいて農業農村開発調査に携わる機会を得た。この調査の主な目的は、メコン沿いの米作地帯を対象とし、農民組織化と農民金融で可能な規模の灌漑施設の整備による乾季稲作の導入や伝統農業の改善による営農の安定を目指した農村開発計画の策定にあった。こうした調査においては、受益者のニーズが計画に反映されると同時に事業の持続性を確保するためにも、住民参加型アプローチが不可欠であると考えられた。

そこで、対象地域内から選定した優先地区において、受益農民が自分達で開発に対する問題点を分析し開発の目標を明らかにすることを目的として PCM ワークショップを実施した。ワークショップへの参加者の選定に当たっては、出来る限り幅広い層からの参加者を求めると共に、村長、村の長老会、女性同盟、青年同盟やその他の農民組織の代表者や教師等が含まれるように配慮した。実施に際しては、イラスト等を数多く用いて、参加者がファシリテーターの話の内容を十分に理解出来るように努めた。さらに、ティーブレイク、ゲーム、時には冗談も交えて出来るだけ参加者がリラックスできてかつ飽きないような工夫も行った。ワークショップ後、各県レベルの関係者も交えて PCM の結果を基に PDM を組み立てる作業を行った。さらに最終段階として、ワークショップに参加しなかった住民も含めて出来るだけ多くの住民を対象に PDM のフィードバックを実施した。情報省・国立図書館員による「お話キャラバン隊」が野外の特設ステージで PDM の内容を盛り込んだ人形劇をミュージカル風に上演した。こうして、広く受益農民に PDM の内容を理解してもらうように努めた。この劇にはゲーム等も織り込み、住民を和ませて劇にひきつけるように工夫した。娯楽の少ない農村部においては、こうした活動が極めて効果的な普及・啓蒙活動の手段となり得る可能性も強く感じる事ができた。

PCM ワークショップのアウトプットとして作成された PDM には参加した農民達の意向が反映された内容となったものの、一連の PDM に盛り込まれた事業目標や計画値は概ね農民達の期待値として表される傾向があった。PCM ワークショップの実施とほぼ平行して、調査団は、村の内容を熟知し情報を多く持っていると思われる住民を対象として詳細な RRA (Rapid Rural Appraisal: 簡易農村調査) を実施した。この RRA 調査に際しては、関係する行政職員を参加させず、調査団員、通訳と村民だけとし、利害関係がなく意見の述べ易い環境になるよう配慮した。また、なるべく頻繁に村に入って食事を伴にするなどして、住民からより詳細かつ本音に近い回答が得られるように努めた。特に数値情報に関しては、クロスチェックを行うなどして精度の高い情報収集に努めた。このようにして調査団が収集した情報ならびに RRA 調査結果から把握した自然及び人的資源、地形・土壌並びに気候的制約、実施機関の能力、環境への影響等を考慮すると、PDM に示された開発計画は実現可能性の面でかなり無理のある内容であると判断された。

こうした経験を通して、様々な参加型手法によって得られた結果をどのように位置付け、得られた結果をさらにどのように分析・評価して行くかが重要であり、かつ開発調査の各段階に応じて様々な手法をどう使い分けるのかといったことも極めて重要であるということ強く感じた。



PCMワークショップ



お話キャラバン隊による人形劇